



聖木曜日 (ルカ 2:16-21)

感謝の祭儀と司祭職の制定、兄弟愛

聖なる三日間が始まります。聖木曜日はその始まりの日です。これから起こることをすべてご存知でおられるイエスにとって、この三日間は弟子たちへの遺言の日々であり、すでに十字架上の苦しみを覚悟する日々であり、復活して御父に栄光を帰する日々でもありました。

聖木曜日は感謝の祭儀と司祭職の制定、兄弟愛について説教する日です。司祭職について考えさせられた大神学院時代の体験を分かち合いたいと思います。わたしたちの頃の大神学院では予科生を終えると本科生になり、スータンを身につけます。本科生の4年間はイエスについて行く、人の救いのために自分の生涯を明け渡す学びが始まる期間です。覚悟をある程度決めたここからが、本当の意味で迷いが生じるのです。

福岡での8年間に2度召命をためらうことがありました。最初のものは、「司祭になんてなりたくない」という気持ちから生まれたためらいでした。ほとんど、それは身勝手から生まれたものです。しかし2度目の、スータンを着用してから訪れた迷いは、これまでとはまったく違った迷いでした。

それは「このまま留まってもよいのだろうか」という迷いです。もしかしたら、このまま留まっていれば司祭になってしまうかも知れませんが、はたして自分がこの使命を引き受けても良いものだろうか？最終的にこのような思いで心が揺れるのです。

誰も、「このままでいいよ」とも「このままじゃいけない」とも言ってくれません。大神学生を指導するために指導司祭がついていましたが、指導司祭も本人の心の中までは知りませんから、指導司祭の目を見て、本人が希望すれば司祭への階段を確実に昇っていくわけです。「本当はまだ準備ができていないのだけれども」とか、「わたしは怖い」中には「しめしめ」と思っている、それを口に出して自分で司祭への階段を降りなければ、レールの上を進む列車は止まらないのです。

用事があって聖堂に行くと、たくさんのスータンを来た先輩たちが、神学院聖堂で跪いている姿を見ました。決められた祈りの時間ではありません。それは自分との闘いの姿だったのだと思います。「わたしはスータンを身につけているが、このまま道を進んでよいのだろうか。身を引くべきではなかろうか」。なりたくなくてのためらいではありません。司祭になりたい人が、ためらって跪いて闘っているわけです。

わたし自身も同じ道をたどりました。指導司祭にも腹を割って相談しました。これこれの弱さを抱えたまま司祭になったとして、それでも大丈夫なのでしょう。正直に指導司祭に指導を仰ぎました。わたしが気にかけていた問題の解決のために、指導司祭といっしょに半年間取り組みました。その時の体験は本当に得難い体験であり、今でも大きな支えとなっています。

最後の晩餐の場面から始まるイエスと弟子たちの三日間も、弟子た

ちのためらいと、イエスの愛による励ましとが折り重なった濃密な三日間だったのだらうと思います。食事の途中に立ち上がって自分たちの足を洗うイエスを見て、ここまで身を低くするイエスに自分たちは最後までついて行けるだらうかとためらったはずです。

のちに十字架の場面では弟子たちの多くが散り散りに逃げ去ってしまいました。イエスはそのことも予見しながら、今は深い愛で、過ちを犯しても立ち返るだけの愛を、いのちの糧である御聖体と共に与えてくださるのです。

弟子たちは、イエスが差し出そうとする聖体の秘跡と愛の奉仕のわざの前に、受け取るにはあまりにも不完全な存在です。それでもイエスは弟子たちを招いて、「皆、これを取って食べなさい」と仰るのです。

触れることもふさわしくない御体と御血を与えてくださいました。感謝の祭儀をこれからも執り行うための司祭職の恵みを与えてくださいました。兄弟愛の模範を与えてくださいました。どれ一つとして、受けるわたしたちがふさわしくないにもかかわらず、惜しみなく与えてください、「取って食べなさい」と仰るのです。

ためらっても、イエスはわたしたちを愛してくださいます。裏切っても、わたしたちにすべてを与え、赦してくださいます。この豊かさが、最後の晩餐の豊かさ、感謝の祭儀・ミサの豊かさです。ここにとどまることができるわたしたちを幸いと呼ばずに、誰を幸いと呼ぶでしょうか。

それぞれ、感謝の祭儀に招かれたことを感謝する一日にしましょう。信徒の皆さんは、自分たちが日常生活で寛大になれないにもかかわらずご自分のすべてを与えてくださったお方に感謝しましょう。

奉献生活にある方々は、至らなさを日々感じる自分をいつまでもそばにおいてくださる寛大な主に感謝しましょう。司祭は信徒の感謝と奉献生活者の感謝に加えて、執り行う祭儀に対して、あまりにも身分不相応な存在を召し出してくださったことに感謝したいと思います。

聖体祭儀に、わたしたちが感謝すべき宝が溢れています。一人ひとり、感謝のうちに持ち帰りましょう。聖体祭儀の後の聖体賛美式にもあずかって、ふだんじっくり向き合えない御聖体と向き合って、感謝の気持ちをおささげしましょう。